

保育者養成課程校で学ぶ「専門学校生」は実習に  
対してどのような不安を感じているのか

—実習不安尺度の作成と自己効力感の関連—

渡 邊 舞

What are the students who study child care at the vocational  
school anxious about their coming practical training ?

Mai Watanabe

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別冊

平成 30 年 2 月 28 日 発行

# 保育者養成課程校で学ぶ「専門学校生」は実習に対してどのような不安を感じているのか

—実習不安尺度の作成と自己効力感の関連—

What are the students who study child care at the vocational school anxious about their coming practical training?

渡邊 舞

Mai Watanabe

## 問題

近年、家族形態の縮小、少子化により子育てに関する環境に注目が集まっている。保育の現場はまさに地域の育児機能の拠点であり、保育者（本報告では、保育所・幼稚園・認定こども園等に勤務する幼稚園教諭、保育士、また子育て支援センター、児童養護施設、児童発達支援センター等に勤務する施設職員を含む）は子どもの発達を支える重要な役割を担う存在である。保育者養成課程校で学ぶ学生にとって実習は学生生活で経験できる実践の場であり、保育の現場を知る重要な機会である。実習に対する不安も大きく、これに関連して、実習への不安を検討する研究は多数存在する（村田・岡本・小林・海野，2004<sup>1)</sup>；田辺・後藤，2016<sup>2)</sup>；長谷部，2007<sup>3)</sup>；越智・佐藤，2012<sup>4)</sup>）。村田ら（2004）は、保育者を目指す学生に対し調査を行い、保育実習への不安の状況として、実習が楽しみであると考えている学生が約7割である一方で、保育実習に対し不安を感じている学生が9割を超えていることを報告している<sup>1)</sup>。また、田辺・後藤（2016）は、実習経験の有無によって実習に対する不安に差異が見られるかを検討している。その結果、実習を経験した学生で実習に対する不安感が高いことを示し、実習を経験し、保育者としての将来を具体的に考えようになった結果、自信よりもむしろ不安として現れたのではないかと考察した<sup>2)</sup>。すなわち実習に対する不安は学生としての在学期間の全般にわたり感じていることを意味する結果であろう。実習に関する不安の内容を検討する調査として長谷部（2007）は、保育者を目指す短大生を対象に調査を行い、実習不安感尺度を20項目で構成し、因子構造を検討した。その結果、指導案の作成や実習の計画遂行に関する不安である「指導」、保育実践や子どもの指導についての事前準備学習に関する不安である「事前理解」、子どもや実習先の指導者との関係構築に関する不安である「人間関係」、実習活動内容に関する不安である「活動内容」の4因子構造であることを報告した<sup>3)</sup>。越智・佐藤（2012）も保育者を目指す短大生を対象に、事前の自由記述から構成した31項目を使用しその因子構造を検討している。その結果、先生や保護者と

のかかわりに関しての不安である「先生、保護者との関係」、子どものかかわりに関しての不安である「子どもとの関係」、保育を実践する力が身についていることに関する不安である「保育実践」、実習中の自身の体力に関する不安である「健康」の4因子であることを報告している<sup>4)</sup>。

一方で学生が専門職として就職し、地域の育児機能の拠点として働く環境の整備も課題の一つである。西坂(2002)は、幼稚園教諭を対象とした調査から、幼稚園教諭用ストレス評定尺度を作成した。この尺度では、「園内の人間関係の問題」・「仕事の多さと時間の欠如」・「子どもの理解・対応の難しさ」・「学級運営の難しさ」の4つの内容が得られている<sup>5)</sup>。現場で働く職員の不安やストレスは、子どもの理解や対応の難しさに加えて、多忙であることや学級運営の難しさ等多岐にわたることを明らかにしたものである。

自己効力感とは、ある状況においてある結果を達成するために必要な行動を自分が上手くできるかどうかの予期のことである(Bandura,1977<sup>6)</sup>)。課題を行うときに、「この課題を達成するために、自分はここまでできるのだ」という自信を持つことが必要であり、保育者養成課程校では、学生の自己効力感を高める実習教育プログラムが重視されている。森(2003)は、自信をもって積極的に仕事を遂行する学生は、明るく快活に実習に取り組んだ結果を示し、保育技術に対する自信を深める要素として、自己効力感の重要性を指摘している<sup>7)</sup>。

本研究では、保育者養成課程校で学ぶ専門学校生を調査対象とする。保育者養成課程校は主に4年制大学、2年制短期大学、専門学校に集約されるが、その中で専門学校は平成19年現在102カ所(全体に占める割合18.1%)であり、入学定員数では7247名(同じく13.3%)を占めており、保育者を目指す学生が学ぶ場の一つである<sup>8)</sup>。本研究の目的は、専門学校で学び保育者をを目指す学生が実習に対して感じている不安の内容を明らかにし、実習不安尺度を作成することである。また自己効力感と実習不安との関連を明らかにすることである。

## 研究1

### 目的

研究1では、保育者養成課程校に通う専門学校生が実習を体験し、ストレスを感じた内容、および不安に感じている内容を収集することである。

### 方法

#### (1) 調査協力者と調査日時

北海道内の専門学校生に質問紙調査を行った。調査協力者は3年生17名(男性2名・女性15名)、1年生101名(男性8名・女性93名)であった。3年生に対しては、2015年8月下旬、1年生に対しては9月中旬に授業の一部を利用して調査を行った。3年生は資格取得に関する全ての実習を終えており、1年生は初めての実習となる体験実習を終えた後の調査実施であった。

## (2) 質問紙の内容と実施方法

3年生には、「これまでの実習を振り返り、辛かった出来事や実習中に悩んだ出来事」を3点以上記入してもらった。また1年生には、「体験実習を終えて、辛かった出来事・大変だった出来事」と「今後の実習に向けて、不安を感じていること」を各1点以上記入してもらった。

## 結果

1年生および3年生に記入してもらった自由記述数は358項目であった。358項目の記述内容について、筆者と専門学校に所属する3年生15名によりKJ法を実施した。その結果、分類できなかった31項目を除外し、「子どもの理解・対応の難しさ(126項目)」・「実習生と職員の関係(41項目)」・「保育技術への不安(67項目)」・「時間と体力への不安(17項目)」・「書きもの(日誌・指導要)への不安(42項目)」・「園内の人間関係(15項目)」・「個人的な不安(17項目)」の7領域に分類した。その後類似した項目を統廃合し、記述数が多かった内容を中心に21項目に集約し、実習不安尺度の項目とした。その項目をTable 1まとめた。

Table 1.実習生の不安に関する内容の項目

- 
- 1 子どもの同士のケンカに対応すること
  - 2 障がいを持った子どもに対応すること
  - 3 実習先で実習生に対する態度が好意的でないこと
  - 4 指導案や日誌を書くこと
  - 5 実習先の職員間で子どもに対する態度が異なること
  - 6 子どもが泣いているときに対応すること
  - 7 子どもの怪我や事故の危険を避けること
  - 8 大勢の子どもに対して平等に対応すること
  - 9 ピアノの技術や歌が上手く歌うこと
  - 10 実習先の職員とコミュニケーションをうまく取ること
  - 11 実習中の精神的な安定を保つこと
  - 12 子どもに注意したり、叱ったりすること
  - 13 攻撃的な子どもに対応すること
  - 14 人見知りの子どもの対応すること
  - 15 手遊びや遊びのレパートリーの数が少ないこと
  - 16 実習先で指示されたことに対応できること
  - 17 実習先の職員間の関係が良くないこと
  - 18 子どもとうまくコミュニケーションをとること
  - 19 子どもの気持ちを汲み取ること
  - 20 実習中の体調管理をすること
  - 21 子どもの発達段階に適した対応をすること
-

## 研究 2

### 目的

研究 2 では、研究 1 で得られた項目から、実習不安尺度を作成することである。また専門学校生の自己効力感を測定し、実習不安尺度との関連を調べることである。

### 方法

#### (1) 調査協力者と調査日時

北海道内の専門学校生に質問紙調査を行った。調査協力者は 1 年生 102 名 (男性 8 名・女性 94 名) であり、平均年齢は 18.8 歳 (SD=1.46) であった。調査は体験実習を終えた 2015 年 11 月上旬に授業の一部を利用して調査を行った。

#### (2) 質問紙の内容と実施方法

1. 年齢を記入してもらい、性別に○を付けてもらった。また体験実習先について、あてはまるものに○を付けてもらった。なお、その他に該当する場合には、具体的な実習先を記入してもらった。実習先の内訳は保育所 43 名、幼稚園 7 名、児童会館 42 名、子育て支援センター 2 名、障がい児・障がい者施設 8 名であった。
2. 研究 1 で収集した項目から、実習不安尺度として 21 項目を使用し、今後の実習に向けて「1 全く不安ではない」から「5 とても不安である」までの 5 段階で回答してもらった。
3. 自己効力感尺度 16 項目 (坂野・東條, 1986) を使用した<sup>9)</sup>。質問項目について「はい」または「いいえ」で回答してもらった。自己効力感が高いと判断される項目に回答があった場合に 1 点が与えられる。したがって、得点の範囲は 0 点～16 点であり、得点が高い人物ほど自己効力感が高いと判定される。

### 結果

#### (1) 実習不安尺度の因子構造

研究 1 で選定した実習に対する不安 21 項目の因子構造を検討するために因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を行った。その結果、21 項目は 3 つの内容に分類された (Table 2 参照)。分析上で、3 つの内容に分類できなかった「11. 実習中に精神的な安定を保つことができなかった」は分析から除外した。第 1 因子は「子ども同士のケンカに対応すること」といった「子どもへの対応と保育実践に関する不安 ( $\alpha = .855$ )」に関する内容であった。第 2 因子は「実習先で指示された通りに対応すること」といった「実習中のコミュニケーションと個人的課題に対する不安 ( $\alpha = .844$ )」に関する内容であった。第 3 因子は「実習先での実習生に対する態度が好意的ではないこと」といった「実習先の職員との関係に対する不安 ( $\alpha = .697$ )」に関する内容であった。第 1 因子 10 項目・第 2 因子 7 項目・第 3 因子 3 項目の合計値を算出し、以下の分析に使用することにした。また、20 項目を全て合計し

た実習不安得点も算出した。

**Table2. 実習不安尺度の因子構造**

**第1因子；子どもへの対応と保育実践に関する不安 ( $\alpha = .855$ )**

子どもの同士のケンカに対応すること	<b>.867</b>	-.035	-.155
子どもが泣いているときに対応すること	<b>.772</b>	.005	.014
障がいを持った子どもに対応すること	<b>.682</b>	-.214	.051
子どもに対して適切に注意したり、叱ったりすること	<b>.534</b>	.126	.049
子どもの怪我や事故に対応すること	<b>.495</b>	-.028	.228
ピアノの技術や歌を上手く歌うこと	<b>.431</b>	.125	-.084
攻撃的な子どもに対応すること	<b>.410</b>	.176	.148
人見知りの子どもの対応すること	<b>.399</b>	.197	.166
指導案や日誌を書くこと	<b>.369</b>	.014	.098
手遊びや遊びのレパートリーの数が少ないこと	<b>.361</b>	.211	-.019

**第2因子；実習中のコミュニケーションと個人的課題に対する不安 ( $\alpha = .844$ )**

実習先で指示された通りに対応すること	-.179	<b>.858</b>	-.091
実習先の職員とコミュニケーションをうまく取ること	-.103	<b>.681</b>	.175
大勢の子どもに対して平等に対応すること	.185	<b>.595</b>	-.153
子どもとうまくコミュニケーションをとること	.230	<b>.566</b>	-.081
実習中の体調管理をすること	-.018	<b>.511</b>	.043
子どもの気持ちを汲み取ること	.309	<b>.507</b>	-.034
子どもの発達段階に応じた対応をすること	.311	<b>.487</b>	.041

**第3因子；実習先の職員との関係に対する不安 ( $\alpha = .697$ )**

実習先での実習生に対する態度が好意的でないこと	.082	-.143	<b>.742</b>
実習先の職員間で子どもに対する態度が異なること	.167	-.118	<b>.637</b>
実習先の職員間の関係が良くないこと	-.249	.370	<b>.578</b>

因子間相関		I	II
	II	.625	
	III	.419	.433

(2) 実習不安尺度と自己効力感の関連

自己効力感の平均値は 6.0 点 (SD=3.81) だった。坂野 (1989) の基準に従い<sup>10)</sup>、0 点～4 点を自己効力感低群 (43 名)・5 点～8 点を自己効力感中群 (29 名)・9 点～15 点を自己効力感高群 (30 名)に分けた。

自己効力感の高い学生と低い学生では、実習に対する不安に差がみられるか検討するために、自己効力感のグループ群 (高群・中群・低群) を被験者間要因の独立変数、実習不安の合計得点、および各因子の合計得点を従属変数とする 1 要因分散分析を行った。その結果、実習不安の合計得点では、自己効力感の有意な主効果が見られ ( $F_{(2,99)}=15.05, p<.001$ )、多重比較 (Tukey 法) の結果、自己効力感が高い人 (68.20 点) は、自己効力感が中程度 (77.10 点) と低い人 (83.40 点) よりも、実習に対する不安が低く、自己効力感が高いと、実習に対する不安を強く感じないことが示された (Figure1 参照)。

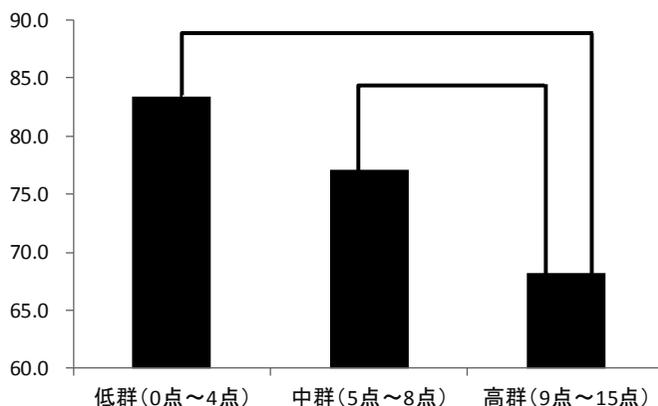


Figure1.自己効力感群における実習不安合計得点の比較

第1因子の「子どもの対応と保育実践に関する不安」の得点では、自己効力感の有意な主効果が見られ ( $F_{(2,99)}=9.37, p<.001$ )、多重比較 (Tukey 法) の結果、自己効力感が高い人は、自己効力感が中程度と低い人よりも、子どもの対応と保育実践に関する不安が低かった。第2因子の「実習中のコミュニケーションと個人的課題に対する不安」の得点では、自己効力感の有意な主効果が見られ ( $F_{(2,99)}=13.58, p<.001$ )、多重比較 (Tukey 法) の結果、自己効力感が高い人と中程度の人は、自己効力感が低い人よりも、実習中のコミュニケーションと個人的課題に対する不安が低かった。第3因子の「実習先での職員との関係に関する不安」の得点では、自己効力感の有意な主効果が見られ ( $F_{(2,99)}=8.42, p<.001$ )、多重比較 (Tukey 法) の結果、自己効力感が高い人は、自己効力感が低い人よりも、実習先での職員との関係に関する不安が低かった (Table3 参照)。

Table3. 自己効力感群における実習不安尺度の各因子の合計得点

	子どもへの対応と保育実践に関する不安	実習中のコミュニケーションと個人的課題に対する不安	実習先の職員との関係に対する不安
自己効力感低群(43名)	41.53	25.74	12.33
自己効力感中群(29名)	39.83	22.45	11.45
自己効力感高群(30名)	35.43	19.57	10.27

## 考察

### (1) 専門学校生の実習不安について

本研究の第一の目的は、保育士養成課程校に在籍する専門学校生が、実習に対してどのような不安

を感じているかを明らかにすることであった。研究 1 で学生自身の自由記述による項目収集から 21 項目で構成される実習不安尺度を作成し、研究 2 で因子構造の検討を行った。因子分析の結果 20 項目での 3 因子構造を採用した。保育者を目指す専門学校生の実習不安は、「子どもへの対応と保育実践」・「実習中のコミュニケーションと個人的課題」・「実習先の職員との関係」に集約されることが明らかになった。第 3 因子の信頼性係数 ( $\alpha$ ) が .697 とやや低い、一定の信頼性も確認できた。また短大生を対象とした研究 (長谷部, 2007; 越智・佐藤, 2012) とほぼ同じような項目内容が抽出されており、保育者養成課程校で学ぶ学生に共通する実習不安を収集できたものと示唆される。一方、越智・佐藤(2012)で報告されている保護者との関わりに関する不安については、本研究では研究 1 の自由記述による調査の中で専門学校生から、これらの内容について収集されなかった。本研究の調査協力者の多くが 1 年生であり、調査時期も入学数か月後の 8 月～9 月であった。したがって現場のイメージもあいまいであり、保育実践や子どもへの対応といった子どもとの関わりに対する不安が中心となって表れたものを思われる。

## (2) 実習不安と自己効力感の関連について

本研究の第二の目的は、第一の目的で作成した実習不安尺度と自己効力感との関連を検討することであった。不安の全体得点、および第 1 因子から第 3 因子別に得点を比較したところ、すべての内容について、自己効力感が高い学生は、実習への不安を低く評定しており、森 (2003) との結果とも一致する結果が得られた。実習前には多くの学生が実習に対して不安を感じるものであろうが、今回測定した全ての実習不安の内容に自己効力感が関連することが明らかになった。したがって実習にかかわる授業のみならず、保育に関する基礎知識や基本技術を学ぶ授業の中で、自己効力感が高まるような授業展開が望まれ、現場の教員および学校職員がその役割を果たしていくことが必要であろう。

## 今後の課題

本研究では保育者を目指す専門学校生を対象に 20 項目からなる実習不安尺度を作成したが、この今後の課題として再検査法による信頼性の検討や他の指標との関連から妥当性の検討が必要である。

また実習不安と自己効力感との関連を検討したが、自己効力感の水準は 2 つある。一つ目は課題や場面に特異的に行動に影響を及ぼす自己効力感であり、二つ目は具体的な個々の課題や状況に依存せず、より一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感である。本研究では前者の自己効力感尺度を採用した。後者は特性的自己効力感と命名され、個人差の存在が想定され得る尺度である。成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田 (1995) は特性的自己効力感の個人差を測定することは、個人の行動を予測し、制御する上で非常に重要となると指摘している<sup>1)</sup>。今後の課題として特性的自己効力感と実習不安尺度との関連も検討する必要がある。

## 引用文献

- 1) 村田務・岡本美智子・小林義郎・海野阿育：保育実習への不安状況に関する調査、白梅学園短期大学教育・福祉研究センター研究年報、9、13-31、2004.
- 2) 田辺恭子・後藤永子：保育養成校学生の保育実習に対する不安の解明、東邦学誌、45、85-97、2016.
- 3) 長谷部比呂美：保育実習に関する学生の意識について—実習不安を中心として—、淑徳短期大学研究紀要、46、81-96、2007.
- 4) 越智幸一・佐藤貴虎、短大生の保育実習不安について、旭川大学短期大学部紀要、42、11-18、2012.
- 5) 西坂小百合：幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス、ハーディネス、保育者効力感の影響、教育心理学研究、50、283-290、2002.
- 6) Bandura, A. : self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change、Psychological Review、84、191-215、1977.
- 7) 森知子：保育者を志す学生の自己効力感と実習評価の関連—保育者養成校における実習教育プログラムをとおして—、臨床教育心理学研究、29、31-41、2003.
- 8) 厚生労働省、保育士養成関係資料、<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/11/dl/s1116-7h.pdf>、情報取得日 2017 年 10 月 8 日.
- 9) 坂野雄二・東條光彦：一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み、行動療法研究、12、73-82、1986.
- 10) 坂野雄二：一般性セルフ・エフィカシー尺度の妥当性の検討、早稲田大学人間科学研究、2、91-98、1989.
- 11) 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子：特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る—、教育心理学研究、43、306-314、1995.